

平成三年五月十九日 和敬塾塾祭記念講演

## 「これからの日本人」

### 私の寮生活

只今、ご紹介に預かりました緒方でございませぬ。私は皆さんのおられるこのような寮（塾）でお話するにはあまりふさわしくない。と申しますのも、私は東京で生まれて、東京で育ち、東京の学校で学びましたので、寮に入ったことがありません。

旧制高校の一年のときに、寮がありました。昭和十九年で戦争がひどくなつてきて、地方から来た人と、希望する人だけ入って、私は特に希望しなかった。そのうち空襲などの関係でたちまち閉鎖されるという状況でした。

そのようなわけで、初めて寮生活に入りましたのは、日本銀行に入行してから四年目、二十六歳の時にフルブライト留学生として米国に渡りまして、ボストンの近くのフレッチャー・スクールという学校に留学し、国際関係論を学んだとき、その小さな寮に入りました。

この学校は、毎年五十人しか採らない。一年で修士をくれる。博士課程におる人も含めて、

せいぜい八十人ぐらいのところでした。そのうち五十人ぐらいが寮生活を送っていて、男子の寮に三十五、六人、女子の寮に十五人ぐらい住んでいました。男子寮と女子寮は並んで建っていて、食堂は男子の寮にありました。三つあるテーブルのヘッドに座った女子学生が我々に料理を分けてくれるというような生活を二年したことがあります。これが学生として初めての寮生活でございました。

私は、丁度一ヶ月前に日本開発銀行を退職いたしました。その後、欧州と米国とにまいりまして、久しぶりに昔の学校を訪れましたところ、寮の建物は二つ並んで残っておりまして、大変懐かしい思いがいたしました。

寮生活では、二つ思い出があります。留学中に父が急死いたしました。その時、学年試験の最中でしたが、友人が寮のハウス・ファーザーのところを集まってくれて、日本とは少し違いますから、お父さんが亡くなったことを悔やむというようなことは余り言わないのですが、夜

遅くまで一緒に起きていてくれて慰めてくれました。

もう一つは、それからしばらくして、私の家庭でよく存じあげている二世の方が尋ねてこられた。その方は戦争中に米国で暮らしていた。米国と日本は敵対関係にありましたから、当時の一世、二世、三世の日系米人の方は大変苦労された。西海岸におった人達は、強制移住させられて、内陸の方でキャンプに入れられた。米国は偉いもので最近になってこの人達に補償金を払っているわけですが、そういう時代に育てられた方が寮に来られたところ、私が米国人のみならず世界中の友達と仲良くやっているのに驚かれた。世の中がここまで変わったのかと感じましたと、日本に帰って私の母に話したと聞いております。

このように、寮の生活は、皆さんもおそらくそうだと思いますが、後から思い出して一生を通じて、非常に懐かしいものだと思います。

私の場合、その小さな学校には各国から来た

前日本開発銀行副総裁 緒方四十郎先生

人が集っていましたが、といって、その時一緒だった人といつも付き合っているわけではない。全部の人と年賀状なりクリスマスカードを交換しているのではない。交際している人は非常に少ないのですけれど、現にパキスタンの駐日大使になった友人と偶然出会ったりすると、国の立場とか職業の違いをこえて昔を思い出しながら仲良くなれる状況です。

皆さんのように、青春の成長期にこうやって同じところに暮らしておられる方を、大変うらやましく思います。

私は、二十六歳になつてから二十八歳までやつとそのような経験をしたのですが、皆さんの方がよい時期に一緒に住んでおられるのではないかと思います。

今日は「これからの日本人」という大変難しい題を賜りまして、これをお話するほどの道徳論の先生でもないので話にくいのですが、私なりに最近感じていることを皆さんにお話ししたいと思います。

私が日本開発銀行に移る前におりました日本銀行では、三十六年在職のうち、約三十年ぐらい国際関係のことを担当していました。大学のときも、法学部政治学科で岡義武先生に政治外交史を学び、米国に留学したときも今では流石していますが、当時はまだ走りの国際関係論をやったものですから、意識の中に日本と外国

との関係、国際関係で日本を見ようとしていました。銀行でお金を勘定しているときも、常にそういう角度からものを考えておりましたので、今の日本について、その角度で、私共のジエネレーションの一人が少なくともこういうことを考えているのだということ申しあげてこれからの講演したいと思います。

### 日本の動きと小国思想

まず、第二次大戦が終つてから、最近までの日本の動きを反省してみることから始めなくてはならぬと思いますが、これを二つの角度から見てみたい。一つは経済の面で、日本が外国との関係でどのように動いて来て、どのように見られているか。次は政治の関係。第三はその起ってくる問題の背後にある日本の政治や経済の関係に対して、日本がどのように対応しているか、また対応しきれずにおるかという三つに絞ってお話します。

日本経済の対外関係ですが、第二次大戦が終つた時、日本は植民地を失つて多くの海外で戦つた兵士が戻つてきた。人的資源はあつたが、その他あらゆる資源を失つて工場なども壊され、賠償として機械なども持つて行かれそうになつた。

従つて、日本の戦後の経済政策は、資源がないから外国から必要な食糧と原材料を買つて、

その原材料を加工して輸出する。そして外資を稼いで、また食糧と原材料を買うといった、輸出を大事にする輸出主導型の経済運営。輸出に關係のある投資を伸ばす努力をして来た。簡単に言えば大いに輸出をして、先進国に追いつこうというのが日本の経済政策の目標であつたわけです。

その結果、ふと気がついてみますと日本は世界最大の黒字国になつていた。また、その黒字でお金を貸して世界で一番、外国に対しての債権国になつている。日本も借りているが、日本が貸しているものと借りているものを差し引きました純債権国になつたわけです。

このように、戦後四十数年の間に世の中は変わってきたが、そのうち、変わらないものと、変わるものが、私共の気持ちの中にあるような気がします。

変わらないのは、特に、私共のように歳をとつたもの、或いは、日本の古来からある産業。例えば、農業であるとか、流通業であるとか、そのようなところにある考え方で、一言で言えば「小国思想」。日本はまだ小さいのだという思想。日本はまだ貧乏だという思想です。輸出は一生懸命するが、輸入は原材料と食糧だけしかしない。その食糧もお米は輸入しない。日本が輸出するのは当然だが、ものによつては、輸入しないのも当然である。なぜなら日本は弱

いからという思想が、未だに日本人の一部の人に、また同じ人でも心の片隅にあるような気がします。

従いまして、現在大変進んでいる産業。例えば自動車産業などをとらえてみても、長い間、日本は後進国だから、日本の産業を強くするために、これを保護しなければいけない。外国の自動車は輸入しないということで保護してきたわけです。幼稚産業、つまり子供の産業というのを保護してきたが、これが大きく成長してもまだ保護していたわけです。

外国から日本は強くなりすぎた、保護をやめるべきだと言われて、保護をやめるときになると日本では生産も行き渡り、普通の日本人は外国の車をわざわざ買う必要もなければ、買う意欲もわかなくなってくる。そこまで幼稚産業を保護するような姿勢が未だに続いている。こうした小国思想が一方にあるわけです。ですから、外国に対してもう少し何かした方がよいという時にまた必ず、日本は弱いんだ、だから保護して行かなくてはいけないとの声が出てくる。

### 大國思想

小国思想とは反対に、最近、日本はここまで輸出を伸ばして世界一の黒字国になり、債権国になってくると、「大國思想」、日本は大きく優れているのだ、日本はこれ以上学ぶことはない

のだというような考え方もまた出てくる。

これは必ずしも新しい人、若い方に出てきているわけでもなく、私共の年代でもそういう人が多い。一昨年ポール・ケネディーという米国の大学の先生が、『大國の興亡』という本を書いたところ、たちまちベストセラーになった。

これを見ると大國は必ず興つては滅びる。それで米國もまた滅びるところにきているのではないかというのがテーマで非常に日本人に受けた。そして今や米國はだめだ、これからは日本だ。日本はもう学ぶことがないのだと、このままほっておくと、日本の産業が世界を支配するというような態度、大國思想が出てきた。

確かに一部の産業では世界の他の国より優れているものはあると思いますが、我々の生活態度などを見て、はたして他の国に優れていると言いつけるかと疑問が残りますが、能ある鷹は爪を隠すではなく、実った稲穂は頭を垂れるではなく、何となく胸を張ってもう日本は外国に学ぶものはないというような大國思想も、日本の中になかなか大きく出てきていると思います。衆議院議員（※当時）の石原慎太郎氏が『NOと言え日本』という本を書かれました。読んでみると、非常に公平に書かれているところもありますが、あのような表題で出たことの背後には、やはり日本はここまで来た、もつと開き直つてもよいのではないかとの感じ

があると思います。

### 經濟面での對外關係

日本の小國思想と大國思想が二つ絡まって存在する状態において、外国は日本をどう見ているかを考えると、いくつかの問題がある。一つは、日本が今まで輸出ばかり、売るばかりで外国の物をあまり進んでは買つてくれない。日本の市場をもつと開いてくれないかという市場開放の声がまずあります。

第二には、保護主義の動きが出てきている。日本の製品がたくさん売れている。もちろん製品が優れているから、自動車や電子製品を買う、値段の割に品質も良い。しかも買った後のサービスも良いので売れている。しかし、世の中というのはすべて付き合ひの世の中ですから、こちら側からばかり売って、向こうから買わないと、日本の物を買うまい、買うのを制限しようとする保護主義の動きが出てくる。

この動きは、単に日本が作った物に対するものだけではない。日本からくる投資。例えば日本の企業がニューヨークのロックフェラーセンターの株の一部を買ったら、もうロックフェラー全体を日本人が買い占めてしまつて、まるでニューヨークの一部が日本の領土になったかの勢いで反発が起つてくるわけです。

つまり、過ぎたるは及ばざるが如しで、日本

の投資は貯蓄の足りない米国にとって大事なことだが、これが目に見えてどしどし入ってくると反発が起ころ。他の国においても起こってくる。例えばタイ国などにも日本の企業が大変進出しているが、この人達は日本の航空会社の飛行機を利用して、日本の食事をして、日本人だけと付き合っているというようなことに対する反感が強い。

昔、日本の経済は本当に貧乏で人的資源しかなかった。その人的資源が、教育のある非常に立派な資源だったので、追いつけ追い越せで頑張った。日本のこのやり方が、ややここに来て一つの壁に到達しているというのが、我々の経済面での対外関係です。

### 政治についての対外関係

政治についての対外関係、国際関係をどのようか考えてみればよいか。先の湾岸危機、湾岸戦争は、日本の政治の上で国際関係の在り方について私共に色々な反省をさせるよい機会だったと思う。日本は戦争が終わった時はもちろん軍国主義国家であった。五・一五事件で国会で選ばれた総理大臣が暗殺されて以来、次第に軍の勢力が支配するようになって、満洲国はどうか、中国本土をも侵略して行く。そして、太平洋戦争と我々が呼んでいる第二次世界大戦に遅れて参戦して連合軍に負けて終わった。

終わった時に、連合軍側が日本の軍国主義がまた復活するのをひどく恐れた。いろいろな説があるが、米国の占領時代に米国の指示で、日本国憲法に第九条という平和主義をうたった条文が入った。その平和主義は、その後次第に私共の心の中に根付いて今や国是になって、この平和主義に反対する人は、ほとんどないという状況になっております。

しかし、ここで反省しなければならぬのは、私共は平和をエンジョイしたけれど、平和のためには、平和に貢献したと思いませんし、日本が武器を輸出しなかったこともそうだと思う。イラクを強くしたのは欧米の軍需産業であって、日本はイラクの石油を買うことはしても、武器は売らなかった。このように世界の平和に貢献してきたことは事実ですけれど、それ以上に本当に平和を維持するために平和主義に徹したかと考えてみると、あまり大きな顔はできないような気がいたします。

平和を維持する方法は、いくつもあるわけですが、一つは武装中立。スウェーデンとかスイスは中立国として尊敬されています。しかし彼等はかなり強大な軍備を持っています。自分がいざとなれば自分の国を守ろうという態度で平和を守っているわけです。これがひとつの生

き方です。日本はこの方針はとらなかったわけです。

もう一つの生き方は、逆に平和的国際的非暴力主義をとることもありえたわけです。例えば、日本は平和を他の国にも強いる。呼びかける。他の国に武力を使わない、暴力を使わないように働きかける方法もありえたわけですが、日本はこのような国際的平和主義をとらなかったわけです。

日本は武器を輸出しなかったけれど、武器を造っている国に援助を続けています。中国がそうです。核兵器を造っているかもしれないインドとかパキスタンなどにも援助をしている。そのときに、そのような危ないものを造っているのなら援助はしないとの態度はとらなかった。従って第二のオプションである国際的非暴力主義に徹するという方法もとらなかったわけです。

では日本はどんな道をとったか。米国との間に安全保障条約を結んで米国の軍に駐留して貰って、米国の核の傘の下で日本の安全を守る。そして自衛隊を作るなり、米国の駐留費の負担をしてきた。

それ以外に何をしたか。一方では、平和だ平和だと言っている否定的な消極的な平和主義と、もう一つはとにかく日本だけ戦火に巻き込まれなければよい、他の国はどうあっても日本

人だけは血を流さないんだという、悪い見方をすれば、利己的平和主義に徹して今日に至っておるわけです。

その間、戦争でかなり儲けている。一九四九年はまだ占領中ですが、日本の経済はガタガタしていた。そのとき占領軍は米国からドッジ氏という有名なバンカーを日本によこして日本経済の立て直しの助言をさせたわけです。

ドッジ氏の助言は、日本の経済は政府の補助金と、米国の援助という二つの竹馬に乗っている竹馬経済である。この竹馬を無くさなければいけない。つまり補助金を大幅に削減して日本経済を竹馬の上でなく自分の足で立つような、経済的にはデフレ政策をとった。その政策によって日本経済は贅肉を切った。贅肉を切った反面、日本の健康状態は崩れてしまうような状況になった。そのとき朝鮮戦争が起こったわけです。

北朝鮮が韓国に侵略を始めた。そこで、ソ連が安保理事會をさぼっている間を利用して国連總會で決議をして、国連軍の名の下に米軍と他の国々の将兵が韓国に赴いて戦った。その拍子に日本に「特需」と称する、日本から輸出してほしいという大きな注文がきた。朝鮮特需です。この特需がなかったら日本はドッジラインのデフレ政策で息も絶え絶えだった。つまり贅肉は切ったが、切った拍子に内臓も働かなくな

るような荒療治をした。このような時期に戦争が起こり日本は非常に潤った。最近の新聞を見ると朝鮮戦争で亡くなった方が日本人の中にいたと言いますが、ごく限られた人で、日本はまったく戦争の便益だけを受けた。

それからベトナム戦争がありました。一九六〇年代。私は今でも覚えていますが、昭和四十三年、一九六八年に当時の日本銀行総裁に同行してストックホルムで開かれた国際会議に出席して帰ってきたところ、羽田で大騒ぎになっていた。私共がアラスカのアンカレッジから東京に向かって飛行機に乗っている間に、米国のジョンソン大統領が演説されて、ベトナム戦争は止めよう、自分はこの次の大統領選挙には出ないと宣言された。その時の日本のリアクションは株の暴落です。

日本人の中には、他の国が戦争しているほうが儲かるのではないか、という気持ちがある。それがジョンソン大統領が戦争を止めようと言っただけで、日本経済に心理的にマイナスのショックが起こるのを見ても、日本の平和主義というものが、いかに曖昧なものかわかる。自分のところは平和で、他人のところは戦争しているほうがうまく行くのだという利己的平和主義でなかったかと考えるわけです。

先般の湾岸の危機についても経済制裁でサ

ダム・フセイン大統領を訴え続けたほうがよかったのか。それとも軍事力に訴えたほうがよかったのか、意見がわかれるところですが、米国でも上院の票が割れた。今になってみると、速い戦闘で米国を中心とする多国籍軍が勝った。勝てば官軍で、皆ブッシュ大統領の判断が良かったといっております。しかし政治は結果論であって、様々な議論があり得たわけです。いろいろな事が起こり得たわけです。そのような状況のもとで日本の対応が何をしているかわからない。平和主義というのは日本だけが平和であればいいのであって、他の国が平和を守ろうとしていることに援助しなくてもいいのかという考え方もあった。それなら日本がイラクと米国の間に立って平和を維持するように働いたかといえれば働かない。サダム・フセインのところは会いに行つた人はたくさんおりましたけれど、引つ込んで下さいというだけで米国の話に行つた人は聞いたことがない。このような状況で本当に何をしたらかわからないこと、ことで世界中から非難を浴びています。

これに対して、我々としても議論があり得るわけです。日本が軍事大国にならなかったことは間違いでなく、今後も軍事大国になるべきではない。日本人の血を流さないことにしたことではないとの意見。或いは日本だけ閉じ籠って一種の日本だけが平和であることが世界の平和

なのだということは、世界では通用しません。軍事大国であるのがいやで、なおかつ世界平和を望むならそれなりのことをしなくてはいけない。例えば戦争の起こりそうな所には経済援助をするとか、或いは政治的にも国際的な場に出るって意見を述べ積極的に参加するようなことがないといけない。米国とイラクが仲が悪かったら、中へ割って入るぐらいの気持ちがないといけないと思います。そのような行動をとらず、ただうろろうろしているのも、また批判を受けている。従って、今になってみますと戦後四十五年経って日本の戦後の対外政策はある種の壁に到達したと思われれます。

これは何も今年始まったことでなく、経済のほうは一九七〇年ぐらゐから変り目がきています。オイルショックがあつて、日本は石油に弱い、従って経済政策の対応を変えなければいけないとのことで努力した。政治面でも本当はもつと前から対応を考えるべきであつたが、昨年の湾岸危機を迎えてしまった。それで、今まで何となく曖昧に取り扱っていた問題に私共は直面しなければいけないことになつたと思います。

### これからの対応策

日本はこのような問題に対応する体制ができていないかを考えてみたい。これは私共の世代

の責任であつて、若い皆さんの責任ではないが、この対応がまことになつておられない。三点あります。

まず政策がない。政策を考えている人はおるが、何かが起こつたとき慌てて考えるのでなかなか考えがまとまらない。話によれば、有力な閣僚が、湾岸の危機が始まつてから手引書がなく、どう対応したらよいか毎日途方に暮れているのだと言われた。と聞いたことがあります。そのように対策を我々のほうで準備をしてなかつた点が、一つ。

第二は、政策を執行する指導力が我々の国には欠けていると考えるわけです。まず政治です。個々の政治家のなかには立派な方もおられますし、いろいろ考えている方もあります。が、私は、今の日本の政治の仕組みがうまくないような気がします。三点あげます。一つは民主政治だというのに選挙区の議席割りが人口の変化と自動的にリンクするようになっていない。東京などもドーナツ化現象で、都心部よりも、世田谷とか荒川区とか周辺に人が集つてくる。このように人口の移動が行われた時に国政をあずかる国会議員の選挙区別の分配が自動的に動くようになっていない。

東京の一票と、山陰の一票では一票の重みが全然違う。東京の一票は全く無力です。この状況があることが一つ。

第二は、中選挙区制の弊害。三人ないし五人が選ばれるシステムのため、野党が弱ければ与党候補が多く出馬して競い合う、どうしてもお金がかかる。中選挙区ではかなり広いから回るだけでもお金がかかる。このような背景から時々新聞を騒がすような疑獄事件が起こる。

それと、政治がだんだん世襲化してきている。金が嵩んで新しい人が出られない。結局自分の家で先祖が政治をやつてないと、政治家にならない。こんなことが続いたら、政治家を先祖に持った人が政治をして、政治家を先祖に持たない人は政治をしないといった二つの日本に分かれると私は冗談を言っていますが、これもおかしい。

第三は、政治の年功序列。職場の年功序列とは違って、政治の年功は、再選回数ですから、数多く選ばれないと年功序列が上にならない。従って若いときに政治家にならないと主要なポストにつけない。しかし本当の民主主義社会では、皆さん職業を持ち、それぞれの職業である程度活躍した人が、その知識と経験とをもつてパブリックサービスとしてやっている。つまりまず他の部門でいろいろなことを成し遂げた人がなるべきだと思います。

現にそのようなことは日本でもありません。学者として、実業家として、或いは新聞記者として、また社会事業家としてある程度のことを

成した方が政界に入りました。今のような年功序列では、若いうちに政治家にならないと、政治家として師団長にも連隊長にもなるわけにはいかないという状況です。このように政治のところも歪んできている。

### 官僚の限界

官僚はどうか。外国の日本通と称せられる方の中に、日本は官僚と経済界がしつかりしているから大丈夫だと言われる方がおられますが、私共が若い頃の官僚と比べると、必ずしも良くなっていない。

要因として一つは環境の変化がある。私共の若い頃は日本の国の目標が非常にはつきりしていた。先ほど申しましたように輸出をして追いつき追い越す、輸出を伸ばして先進国に追いつけとこのことでしたから、どの省にしようと目標が明確であった。

ところが今日のように、日本が世界で最大の黒字国になり、最大の純債権国になったが、その割には意見も言わない。自分のところの小さな平和を守って、世界の平和のためにはお金を出す以外のことはあまり行わない。智恵も出さないとこの状況になってまいりますと、官僚制度もセクシヨナリズムと申しますか、特定の利益をリンクしているような感じがしてきます。部門別に利益が分かれていて、このような状況

を乗り越える人がいない。

### 経済界について

それでは経済界はどうか。日本は政経分離の国で、政治はだめだけれど経済は立派だ、経済界には立派な人がいると言われてきておりまです。これもよく考えてみると、今変わり目になっていると思います。戦争が終わった時に、米国の占領軍が日本の戦争中の指導者を、パージと称して公的活動から排除した。その時、戦争中の指導者だけでなく後継ぎになれる人も排除された。そこで四十ぐらいの方が、突如会社の首脳部に踊り出た。この人達が日本を再建して下さったわけで、立派な指導者でした。先ほどこの会場の横の廊下を歩いてみて、その中の多くの方がこの塾にきて色紙を書いておられるのを見ました。

この人達は、日本の再建に非常に功績がありました。この人達は、日本の再建に功績がありました。人間的なやることにはプラスとマイナスとがある。プラス面は日本を再建したこと。及び、わりと早く会社の仕事を後継者に譲られて財界の指導者になられた。そして、財界を牛耳ってこられたために日本は経済界としてまとまった意見を持って、まとまった行動をしてきたことはプラスであった。

しかし、マイナスもあった。社業は早くから後継者に譲ったから会社はみんな立派になっ

たが、この後継者は、会社のことばかりを考える人間になってしまった。つまり財界活動は先輩に任せておけばよい、我々は会社を大きくするとのことで、その後の後継者達はみんな社業専念型になった。

ところが、財界指導者も今や八十年代、九十年代になられて引退されるなり、または健康が崩れるというような段階に達している。そのときに経済界をまとめあげる後継者が養成されているかというところ、社業の後継者はいるけれども、財界の後継者はいないという状況が一つあるわけです。これが日本の経済界および財界の問題点です。

つまり、個々の企業としては立派な企業を作り、技術革新、経営の革新は非常に進んでいて、中には外国から学ぶものは何もないというように考えると、どこまでいっているが、これを全体的に日本経済界としてどう考えたらよいかと考える人達を養成しておかなかった。多くの方々が、よい大学を出て大きな組織に入ってサラリーマンになる。そして社業に専念して昇進していく、社業をやってないと上に昇れない。財界活動に若い時から出る機会がない、よくできればできるほど出してもらえないわけです。そのような悪循環がある。

大学を出たときは、おそらく一番できる人は大組織に入ったに違いない。それが実状ですが、

この人達は大体において官僚になればセクター専念型に、会社に入れば社業専念型になってしまうというようなことで今日に至っていることが問題ではないかと思うわけです。

### 教育の問題点

そこでもう一つ開き直って考えてみると、このようになった背後に何があるか。私は日本の教育に問題がある。また教育に問題があるのは日本の社会の反映ではないかと考えます。

私も長い間日本銀行と最近までおりました日本開発銀行において、いろいろな国際会議に出ましたが、私共はどうみても日本の平均的日本人の代表です。なぜかという日本は平等の平均国家だからです。よその国は後進国であろうと共産主義国であろうと、米国のような資本主義国であろうと、出席する人は本当のエリートです。よそはエリート国家、日本は平均国家。この善し悪しが日本の教育に反映しているのではないというのがポイントです。

私は日本の平等社会というのは大変結構なことだと思います、ある人の説によると、私の生まれた昭和二年（一九二七年）の大企業の社長は税引きの給料と当時の大卒の税引きの給料の比が一〇〇対一で、社長は新米社員の一〇〇倍の収入があったらしい。しかし、昭和四十九年（一九七四年）にはその差が七・八対一に

なっている。日本はそれだけ平等社会になってきたわけです。

これは戦後の社会改革と、累進課税という、所得が多ければそれだけ高い税率の税金がかかる制度で社会が平等になった。日本でアンケートをすると、九割以上の人が中産階級だと答え、下層階級とか上流階級とか言う人はほとんどいないように、所得の点でも意識の点でも日本は中産階級の社会であって、これが日本の社会的、政治的安定の根幹を成していることは間違いない。これは大変結構なことで今後も維持しなくてはならない。

ところが、このことが日本の教育に反映しているわけです。日本の教育は何がねらいかという、平均の水準を上げること、および一番でない学生の水準を上げることにおかれていて、そこに特色がある。しかし、特にある科目が優れている人に対しては必ずしも親切ではない。従って芸術の分野でも非常に優れた人は日本で教わるころがない。日本にいると嫌がられるということで、外国に勉強に行く人がいる。行ける人は運の良い人で、行けない人もたくさんいるわけです。

そのようなことで、日本の教育は平均水準を上げるという意味では、非常に優れている。おそらく日本の平均的な学生、生徒の水準は海外のそれより遥かに優れておるでしょう。日本で

一番できない学生生徒の水準は、海外の多くの国の一番できない学生生徒の水準より高いと思います。それがトップの方はそうではない。

これが端的に表れているのが学校制度です。例えば日本の小学校、中学校とかは世界的水準から見ても非常に立派なものだと思います。私も子供を連れて米国に住んだことがありますからよくわかります。読み書き、あるいは算数とかは日本の子供達の方が優れています。しかし、大学とか大学院については、世界で一番優れた大学は日本にない。受験の偏差値が高いとか、就職率がよいとかでは優れているかもしれませんが、日本という蛸壺社会の中で優れているだけで、世界的にはそれほど優れていない。なぜか。できる人達を伸そうとしない平均点主義だからです。「なんとなく」できる人が職場でも出世する、学校でも大切にされる。やはりこれを直して行かなければならない。

日本のこれからの最大の課題は、日本の平等社会のよいところを残しながら、どのようにしてもう少し凸凹をつけるか。特色のあるものにするか。出る杭を打たないようにしなければなりません。

例えば、ある人は芸術には優れているけれど算数はだめだ、といっても、芸術に優れているところを買う。国語は全然だめでも、算数のできることを買う、人の良いところをなるべく見

るように教育を変えて行かなければいけない  
と思います。

私も一昨年の四月から先月まで、中央教育審  
議会の委員をさせられました。他の委員は教育  
のプロまたはセミプロの方ばかりおられたの  
ですが、私は、西洋に「戦争はあんまり大事す  
ぎて軍人だけに任せられない」との諺がある。  
それをもじって我々経済人に対して「経済はあ  
んまり大事すぎて銀行家とかエコノミストに  
は任せられない」と言う人があるが、私は「教  
育はあんまり大事すぎてあなた方のようなプ  
ロとセミプロばかりの教育専門家に任せられ  
ない」という精神でここに来ていと言ったり  
していました。審議会はいろいろな人の意見の  
集約ですから、私の意見とおりにはありません  
が、常にテーマにして多くの方からご賛同をい  
ただいたのは、平等社会の良いところを残しな  
がら優れているものを生み出すかということ  
です。

平等社会を止めてしまうのはわけない。欧州  
は、いまだに早くから職業について職人になる  
人と、大学まで行って指導者になる人が家庭的  
環境等で最初から分かれている。しかし、日本  
の場合には中学校の卒業生の九十五%が高校  
に進学しています。そのかなりの部分が何とな  
く行っている。他の人が行くから行く。そして  
そのうち三十%は大学に行くという状況です。

高校も職業高校を選ばず普通高校に何となく  
行く、大学もほかの人が行くから行く。そして、  
偏差値でどの大学がよいか悪いか議論してい  
る状況になつていいる。このようなことはやはり  
ある種の悪循環の一つだと思ひます。ですから  
どのようにして平等社会を残しながら、もう少  
し凸凹あるものにして行くか、日本の教育の最  
大の課題ではないかと考えます。

### 次の世代への五つの希望

私も、先頃退職いたしましたして、以上勝手なこ  
とを申し上げましたが、私共の世代も六十を過  
ぎました。この間、日本の戦後の復興に携り、  
力の及ばないところもあり、またいろいろ不始  
末もありましたことを率直に皆さんのような  
春秋に富んだ将来有為な方に訴えて、今後の参  
考にして貰いたいと思つたわけでござります。

最後に先輩として私が、皆さん若い方に希望  
として思つていいることを、いくつか項目別にお  
話しします。

若干項目がそれぞれ、あるいは相互に矛盾し  
ていることがあります。それは矛盾があれば  
あるほど、それだけ意味があるのだと思つて頂  
ければよいと思ひます。

まず第一点は、協調と独立ということ。す  
やはり我々は社会的動物です。これは、アリス  
トテレス以来、人間は社会的動物です。社会を

組織しているからには、他人と協調しなければ  
いけないけれども、同時に独立といひますか付  
和雷同しない。必ず自分の考えを持つてほしい。  
協調はするが自己の独立は維持する。これが第  
一点。

第二点はそれとやや関連がありますが、いろ  
いろ広く学んで、東西古今の先学が学ばれたと  
ころを撰取して頂きたい。しかし、ここが矛盾  
していいるのですが、ぜひ自分の頭で考えてほし  
い。私共の周辺でも何か話をする、誰とかは  
こう言ひました、誰とかはこう言つてます、新  
聞にはこう書いてありますと引用ばかりする  
人がいます。学術論文であれば引用した場合は  
出所を明記すべきですが、我々個人の生活とし  
ては、自分の頭で、どんな幼稚な、*This is a  
pen.* といったような単純なロジックでもい  
いから自分で考えてほしい。これが大切なこと  
です。

同時に私は常に知的好奇心をあらゆること  
において持つてほしい。自分で考えることと裏  
腹ですが、自分で考えることは、ただ題目を与  
えられただけでなくて自分で題目を考える。

日本の学生は、与えられた質問に対する答え  
なら、世界で一番うまいそうです。しかし、世  
界では有数に質問を作るのが下手です。その証  
拠には講演会などに行きますと、質疑応答の時  
間を与えても質問が出ません。サクラ以外の人

は質問をしてくれないということ、これは知的好奇心の欠如からきているわけです。

第三点、ぜひ自分の意見を述べる、と同時に他人の意見を聞くということをしてほしい。大切なのはそのときお互いに肩を張らないように。

日本のような同質社会にいと、大体において大勢に順応しているのは楽です。私のおりました日本銀行や日本開発銀行などでも、何となく皆がそう思っていることに付和雷同することぐらい楽なことはいけません。そのような会社あるいは日本で、違った意見を述べることは不自由なことで、つい肩が張ったり声が大きくなったりします。私も家族によく言われますが、米国や英国の人と議論していると声がだんだん大きくなってくるのは緊張状態の表れではないかと。自分自身緊張状態をもって異論を唱えているのではないかと言われます。

笑って異論を唱える。自分の意見を述べるが、人の意見にも耳を傾ける。人と意見が違うときにそれを和やかに言えるような習慣を若いうちから身につけて頂きたい。

第四番目、これは特権と責任ということです。皆さんのように非常に恵まれた環境に住んで勉強できることは、皆さんのご家庭の支援もあるし、今までの学校、それから先生方のご指導など、運の良いことが重なったと思います。

この状況のもとで私がお願したいのは、この特権、幸福を大いにかつ十分にエンジョイして、ここにいなければこの状況がなければ出来ないような勉強なり遊びなり、あるいは生活をして頂きたい。これが私の言う特権です。

しかし、同時にこのような特権にあずかれない人が沢山いることを考えて頂きたい。人間はどこに生まれるかは全く皆さんのチョイスでおこったことではない。私が通産省の石炭鉱業審議会の委員をしているとき、北海道の夕張石炭歴史館を見に行った。昔炭鉱で働いておられた方のみじめな生活がパノラマ風に出てくるわけです。これを見て思った。偶然の問題として私が夕張炭鉱の家に生まれる可能性もあった。それでしたらここでこんな生活をしたかも知れない。東京の、子供を大学にやるような家庭にたまたま生まれて、寮にも行かず、先ほど申し上げた道を歩んで来た。どこに生まれるかというのは全く偶然なのです。したがって皆さんがこの和敬塾に送って下さるようなご家庭に生まれたということは全く偶然の幸運です。すから、この幸運にあずかれない人に対しては、常にそれなりの配慮をして頂きたい。

諺に、ロックフェラーという米国の金持ちの家の家訓は、収入があったら三分の一は自分が使う。三分の一は貯金する。三分の一は慈善事業に捧げるといふようなことをいっています。

ロックフェラーと自分のところは違う、とてもできないといわれると困りますが、そういう気持ちを是非持つて頂きたい。

中教審のとき、日本一の受験校灘高の校長が見えて、灘高は別に詰め込み教育も、受験教育もしていない。集った学生は自然に伸び伸びとやっているが出来るのだと話をされましたので、私はたずねた。それはそうでしょう、しかし灘高に入ってくるのはかなり恵まれた家庭の方、恵まれた子供さんである。その人達に恵まれていない人がいること、その人達への思いやり、また何をすべきか学校で教えていますかと聞いたら、先生いわく、入学式の時に一言申し上げていますと。このような態度なのです。だから、世の受験校は批判を受けるわけです。

皆さんは恵まれた日本の中でも恵まれた人です。その特権を大いに享受して自分を伸ばして頂きたい。反面恵まれない人は日本だけでなく、世界中にいるわけです。皆さんも場合によってはバンングラディッシュに生まれて、この間の物凄い天災に遭っているかもしれない。あるいはクルド族に生まれて今頃トルコの山の中に入っているかもしれないということ考えてほしい。これは全く偶然なことで、偶然で恵まれたことをエンジョイすると同時に、偶然で恵まれない人なことを思いやってほしいというのが私の第四点です。

第五番目。専門的であってほしいが、すぐに誰にでも替わられるようにしてほしいということ。ちよつときぎぎな英語で言いますと、*indispensable* な人になってほしいけれど、常に *replaceable* な人であってほしいということ。これは今皆さん在学中でこのようなことは考えないと思いますが、今後企業なり官庁の職場に行かれた場合で考えてほしい。この自分に与えられたこの問題は、自分が専門家なんだ、自分以外にはここまでわかる人はいない、自分は *indispensable* だ、かけがいのない人だとの誇りを一方で持つてほしいのですが、同時に我々も生身で、出勤途上に怪我をするかもしれない。あるいは遅刻することもある。だから一方では俺は専門家なんだ、俺でなければだめなんだとの意気込みと同時に、自分が急にいなくても、必ず誰かとして替わられるようにして貰わねばならない。個人で画家になられるとか彫刻家になられる方は別ですが、組織に入られる方は、必ずチームワークです。自分が専門家であればあるほど自分が突如いなくなったとき、あるいは間に合わなかったときの手当をしておかなければならない。*indispensability* と *replaceability*。そのようなことを心がけますと、自分が *indispensable* というポストから外されたときも、*indispensable* な人は誰もいない、誰でも替わられるといった淡々とした気持ちで

次の職場に行くこともできる。皆さんは社会人になっておられないので、早目ですが、五番目の希望として申しあげたい。

私が今まで申したことは、自分自身で実行しているわけではなく、四十一年に及ぶサラリーマン生活を振り返って、あのようになしておけばよかった、こうすればよかった。肩を張らずに議論をしておけばよかった。もう少し知的関心を持つて人の話を聞き、気の利いた質問をしておけばよかった。恵まれない人々に対して配慮すべきだった、自分のことばかり考えていたのではなかったかと。そして、自分の仕事に専念して自分が休むと他の人が困ったのではないか、というようなことを反省するがゆえに申しあげるわけです。

「これからの日本人」の話になったかどうか、お話ししたことは、今までの日本人が一見よさそうに見えるけれども、へまもしてきたことを率直に申しあげてこれからの日本人である皆様方に、先人の失敗を教訓として我々を乗り越えて進んで頂きたい。

しかし、最後にお願ひしたいのは、私の申しあげたことを鵜呑みにしないでほしい。自分の頭で考えてほしい。私が言ったからとのことではなく、これを参考にして「自分の考えで自分で行動し、自分で思索し、自分で発言する」ということで今後の長い一生を送って頂きたい」と

いうことを申しあげて記念講演を終わらせて頂きたいと思えます。どうも、清聴ありがとうございました。(拍手)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。